

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 5 日現在

機関番号：13901

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2011

課題番号：21720140

研究課題名（和文）

現代中国語における可能表現研究—領属物としての能力とその発現

研究課題名（英文）

A Study of Potential Expressions in Modern Chinese

研究代表者

勝川 裕子 (KATSUKAWA YUKO)

名古屋大学・国際言語文化研究科・准教授

研究者番号：40377768

研究成果の概要（和文）：本研究は、領属物としての「能力」とその発現に着目し、現代中国語において能力の発現—即ち「～デキル」という動作・状態の実現に対し、中国語話者がどのように認識し、それをどのように言語化するかについて、領属範疇、可能範疇の観点から双方向的に考察することを通じ、現代中国語における可能表現をより合理的且つ包括的に体系化することを目指した。

研究成果の概要（英文）：This study aims to describe the process of grammaticalization in Modern Chinese potential expressions —“hui(会)/neng(能)/keyi(可以)” and “V de(得) R/D” — with reference to the situation in Japanese.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2009年度 | 600,000 | 180,000 | 780,000 |
| 2010年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 2011年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 総計 | 1,600,000 | 480,000 | 2,080,000 |

研究分野：中国語学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：現代中国語、可能表現、能力、属性、動作の実現

1. 研究開始当初の背景

報告者（勝川）はこれまで、可譲渡所有（alienable possession）と不可譲渡所有（inalienable possession）の概念を援用し、現代中国語において如何なる領属関係が可譲渡、或いは不可譲渡であると認識されるか、また言語表現上、それがどのように反映されているかについて、統語的・意味的側面から分析を進めてきた。

その実践例として、平成 17 年～19 年度科学研究費補助金（若手研究（B））「現代中国語における領属関係に関する研究」（研究代表者：勝川）では、領属の可/不可譲渡性の観点から、領属タイプを連続的に位置づけ、これを「領属モデル」として提示し、現代中国語における領属範疇の体系化を試みた。

【現代中国語における領属モデル】

身体部位 > 属性 > 装着類 >

人間関係 > 一般領属物

こうした一連の研究を背景に、本研究では、上記領属モデルの「属性」に含まれる「能力 (ability)」とその発現——即ち領属主が有する「能力」を以って、動作・状態の実現が可能となることを表わす表現に着目し、従来の先行研究において多くみられた個別的な事象の指摘にとどまらない「言語と認知」との関連という立場から、領属主が自らの領属物である能力の発現をどのように認知するか、また、それがどのように言語事象に反映されているのかを明らかにすることを試みた。可能表現とは、ある動作または状態を実現する能力が、動作・状態の担い手（即ち領属主）にあることを表わす表現であり、この意味では領属範疇と可能範疇は深い関連性をもつ文法範疇であると考えられる。

2. 研究の目的

言語事実として、「領属関係(所有関係)」は領属先(所有者)を示す語と領属物(所有物)を示す語が文中で共起する場合、一定の統語的制約のもとで、各種表現形式において様々な様相を呈している。例えば、身体部位を表す名詞は、それが原則として人間全てに等しく、且つ不可分に領有されているという言語外的事実に起因して、言語現象においても他の名詞とは異なった統語的振舞いをするのが世界の多くの言語で知られている。これは現代中国語においても例外ではなく、様々な構文において、身体部位を中心とするある特定の名詞群は他の名詞とは異なる統語的振舞いを呈している。

領属に対するこのような表現の相違は、

同じ領属を表す関係において、中国語話者が身体部位を中心とする名詞群をその他の領属物とは異質であると認識していることを示唆している。このような表現の相違は、領属関係に対する認識の相違が言語表現において表層化された結果であり、換言すれば、領属を表す表現形式の相違は発話者の領属に対する認識の相違を反映していると言える。

こうした着想を背景に、報告者(勝川)は、これまでの先行研究において個別的な事象の指摘に留まっていた言語現象について、領属範疇の観点から捉え直し、より包括的な分析を進め、最終的には中国語話者の「領属物」に対する認知パターンとそのプロトタイプ効果を明らかにすることを研究の全体構想に掲げている。

本研究では、領属モデルの中でも比較的譲渡性の低い「属性」に含まれる「能力 (ability)」とその発現に着目し、現代中国語において能力の発現——即ち「～デキル」という動作・状態の実現に対し、中国語話者がどのように認識し、それをどのように言語化するかについて、領属範疇と可能範疇の両側面から考察した。

現代中国語の<可能>を表わす表現形式としては、主に i) 助動詞「会/能/可以」を用いる形式と、ii) 可能補語「V 得 R/D」(V:動詞、R:結果補語、D:方向補語を表わす)を用いる形式の2タイプが存在するが、i) タイプ内部だけを取り上げても、それぞれの用法が重複しており、また、<可能>以外にも<可能性・蓋然性>を表すなど、多義性を含むことが指摘されている。また、いずれの表現形式においても肯定文と否定文とでは文法的機能が異なり、使用分布の不均衡が見られる。このように、<可能>を表わす文法マーカが複数存在し、且つ

多義性を有するという事は、中国語話者の可能——即ち能力の発現に対する複雑な認知パターンを反映していることを示唆している。

本研究は、このような複雑な形式と意味を持つ可能表現を取り上げ、現代中国語における可能範疇をより合理的且つ包括的に体系化することを目指すものである。

3. 研究の方法

本研究の目的を遂行する前段階として、用例調査を中心的な作業として行なった。言語分析において理論的枠組みを構築する際、大量の用例収集とその分析が主な課題となるが、用例収集に関しては現在では中国における検索サイトを利用するのが効率的で、かつ多岐にわたる分野からの用例が取得可能となる。報告者(勝川)はこれまで、中国の著名作家による小説をCD-ROM化した「中国現代文学名著百部(1)(2)」(北京銀冠電子出版有限公司)などをテキストファイルとしてデータベースを構築し、それをベースに用例検索を行ってきた。しかし、上記データベースは主に文言文によるものであり、出典が古く、インフォーマントの語感に合わなくなっている用例が少なくない。また、本研究では、談話レベルにおける“会”と“能”の使い分け及び使用分布について、各表現の成立許容度との関連において指摘し、その許容度をパーセンテージで表記するという方法により論証していくため、小説のような文言文のみならず、新聞・雑誌まで含めたより広い範囲のコーパスを収集した。本研究では、中国語新聞の電子版である「北京版報内容検索光盤」を導入し、新たにコーパスの収集、及びデータベースの構築に努めた。また、作業の更なる効率化

を図るために、コーパスをhtml形式のまま保存し、まとめて検索することが可能なソフト「JGB多言語全文検索システム」(凱希メディアサービス)を導入し、新聞や雑誌、広告CMなど多岐にわたる言語資料から用例を収集した。

4. 研究成果

(1) 助動詞“会”と“能”を用いた可能表現を取り上げ、領属範疇と可能範疇の関連性について、領属主の「能力(ability)」とその発現という観点からアプローチし、本研究における理論的枠組みの基礎構築を目指した。上記の分析の足がかりとして、領属物の中でも不可譲渡性の高いとされる「属性」に着目し、可能表現を通じて領属主の属性をどのように描写するかについて明らかにした。

まず、助動詞“会”を用いる可能表現は、恒常的、非特定時間的に反復可能なく能力>の発現を表わすことから、その動作・状態の担い手の属性として捉えられ、主体の意志や外的条件に依存することなく、事柄が自然に成り立つことを表わすことを明らかにした。このことから、本研究では、助動詞“会”を用いる可能表現は、「動作・状態の担い手が兼ね備える生得的・習得的能力を以ってその属性を描く」ことを表現意図としていると指摘した。

また、助動詞“会”は、具体的な時空間・条件の中で、動作が個別的・具体的に、どの程度実現されるかを表現する<動作の実現>とは関与せず、<動作の実現>の背景にある動作主体の<意志性>とも関わらないため、望ましくない事態を表わす動作・状態とも共起可能であることを論証した。

(2) 助動詞“会”を用いた可能表現を取り上げ、「可能」を表す助動詞“会”から「上手い」

という意味が派生するプロセスに関する考察を通じ、“会”がもつ根本的な表現機能について追究を試みた。具体的な研究成果は、次の2点に集約される。

まず、可能を表す助動詞“会”は<能力所有>を表す表現であり、生得的に兼ね備えられて、或いは後天的に習い覚えて、やり方を会得している状態を表し、主体の意志や外的条件に依存することはないことを明らかにした。そして、誰もが会得していると考えられる技巧・技能をベースとして、さらに「(一般よりも) 上手くデキル」、「優れている、上手だ」といった意に転じていくことを指摘した。

次に、可能を表す“会”と「上手い」を表す“(很) 会”は、何れも実際に「動作が(上手く) 実現デキル」ことを表す表現ではなく、主体の性格や特徴といった属性を「可能」という観点から捉えることで、主体がどういった人物タイプであるかを描く表現であることを指摘した。また、従来、“开车/骑马”のような能動的な習得を要する技能は“很会～”とは共起し得ないと指摘されてきたが、このような典型的技能であっても、主体や描写対象がどのような属性を兼ね備えた人物であるかを描写する環境では“很会～”を用いることが可能であることを明らかにした。

(3) 研究の総括として、<可能>のプロトタイプと拡張プロセスを示し、現代中国語における可能範疇の体系化を試みた。

まず、<可能>のプロトタイプを「動作・状態を実現する能力があること」と規定することにより、可能範疇において、まず<能力可能>が上位概念として存在し、そこから、<属性可能>、<条件可能>、<結果可能>、<認識可能>へとそれぞれ意味拡張し

ていくことを指摘した。このように可能の意味を連続的に捉えることにより、これまで個別的な事象の指摘に留まっていた種々の可能表現に有機的な関連性を持たせることができる。

また、森田(1977)が「<可能>は<希望>の結論として存在し、“...したい”→“...することができる”と意思的にとらえるところに特色がある」と述べるように、日本語の可能表現は動詞の意志性に深く関わり、無意志動詞は可能表現に用いられにくいことが指摘されているが、現代中国語においても、助動詞“能”が表わす<能力可能>や<条件可能>、可能補語が表わす<結果可能>などにこのような傾向が見られる一方、<属性可能>を表す“会”はあくまでも領属主の属性としての「能力」が発現可能な状態にあることを表わすため、望ましくない事態を表わす動作・状態とも共起可能であることを明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

1. 勝川裕子 2011「可能の助動詞“会”の属性描写機能」、『日中言語対照研究論集』第13号、白帝社、15頁-30頁、査読有。
2. 勝川裕子 2011「可能の助動詞“会”の表現機能と「上手い」への派生について」、『中国語教育』第9号、中国語教育学会、101頁-114頁、査読有。
3. 勝川裕子 2008「現代中国語における領属モデル」、『多元文化』第8号、名古屋大学国際言語文化研究科、333頁-348頁、査読有。
4. 勝川裕子 2008「現代中国語における領属タイプと不可譲渡性」、『言語文化論集』第29巻 第2号、名古屋大学大学院国際

言語文化研究科、391 頁－404 頁、査読無。

〔学会発表〕（計 4 件）

1. 勝川裕子、「現代中国語における領属の譲渡性について」、华东政法大学・名古屋大学共同日本学国際研究会、2012 年 1 月 14 日、华东政法大学。
2. 勝川裕子、「“他很会开车”の成立可否について」、日本中国語学会東海支部例会、2010 年 11 月 27 日、於名古屋大学。
3. 勝川裕子、「属性描写としての可能表現－〈希望〉と〈可能〉の観点から－」、中国語教育学会第 6 回全国大会、2008 年 6 月 8 日、於北九州市立大学。
4. 勝川裕子、「可能の意味と表現形式－助動詞“会”の表す「能力」－」、日本中国語学会東海支部例会 創立十周年記念特別企画、2007 年 10 月 6 日、於愛知大学。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

勝川 裕子 (KATSUKAWA YUKO)
名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・
准教授
研究者番号：40377768

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし